これにより「此地の風俗を見受けるより始めて発明」した体験から、「たとへ男たりとも女たりとも同じ人間に候」という認識に至り、「女ならば西洋に生れ候事に御座候」と結論づけたのである。これは謙斎が到達した人間観、すなわち近代的認識という文化変容を示すものであろう。これが帰国後の思想形成にどのように働くのか、これからの検証すべき一観点である。

現在、酒井シヅ教授の下に池田文書研究会が結成され、私も末席の一員として謙斎宛諸家書状を翻字しているが、上記の人間的側面もさりながら、軍医・侍医・大学行政上の顕官歴任と人事管掌、同経歴の医学系官僚との相違点、患者との関係などに収斂するような諸問題を通じ、総じて医師のもつカリスマ性の形成過程が見られるのではないかと思っている。

（岩崎　鐵志）

〔発行人・高崎斐子、安部恭子、安部信愛、札幌市中央区北七条西十九丁目、電話〇一一―六二一一―〇八六九、一九九一年七月刊、B五判、二〇八頁、定価五一五〇円〕

山本厚子著『野口英世　知られざる軌跡』

細菌学者野口英世に関する著述は、生存中の野口をして〝こんな出鱈目を〟と嘆かさせた「発見王野口英世」（大正四年）以来その数を確め得ない。戦前は靖国思想に基づく二宮尊徳と共に、神格巨像修身教材にされ、戦後はその反作用で人間野口像の追究が、梅毒病原体純粋培養、黄熱病原菌発見の誤りから遂には自殺説にまで進展して来た。

著者は、わが国経済援助計画調査団通訳として現地に滞在中、野口の南米・アフリカに於ける黄熱病の取組みと、ロックフェラー財団等の調査に基づき、妻メリーに焦点を当てたもので、メリーの記述は稀少なものである。

第一部はラテンアメリカを駆け巡った国際人のパイオニア。第二部は伝記から抹殺されたメリー・ロレッタ・ダージス。で構成されている。

メキシコについては、野口が当地を訪れた時は二十九歳の医学生で、野口の寝食を忘れ研究に没頭する姿に強く影響を受け、毎日講義も受けたというオトリオ・ビジャヌエバ博士長女よりの聞き取り、「賢者野口英世博士が到着」の標題になる現地新聞記事、ユカタン州立医薬科大学名誉医学外科博士号授与に関する通知案内状と式典の状況等を同大学資料に基づき記載している。

ペルーについては「オロヤ熱病原体バルトネジャ・バシリフォルシスの培養」が記された一九二六年官報、ペルー公衆衛生局長セバスチャン・ロレンテより得た在ニューヨークの野口に宛てたペルーでの講演会要請、オロヤ熱の研究など三通の書簡コピーを含むペルー国立公衆衛生研究所の資料、一九八二年日本国の無償資金援助計画により建設された、国立精神衛生研究所オノリオ・デルガードヒデヨ・ノグチの初代所長による、オロヤ熱に並ぶ精神病学上の野口業績、黄熱病

研究が現在誤りとして訂正されているのは周知であるが、それで野口の評価は変るものではない、とする同所エレル博士の評言、野口の盟友星一が創設したツルマーヨ薬草園とその後の記述がある。

ブラジルでは一九二三年十一月二十三日付、サンパウロ邦字新聞伯刺西爾時報の野口ブラジル到着、十一月十一日付「野口博士発見の黄熱病原菌があった」等の記事を紹介し現地の対応ぶりを記している。

第二部は、野口の妻であるアメリカ人女性とはどのような人であったのか、のテーマで一九三〇年六月十二日付ニューヨークのヘラルド・トリビューン紙記載「ペンシルベニア州ダイモア出身のメリー・ノグチ夫人は日本人科学者で故野口英世博士と結婚した時に失効したアメリカ市民権を昨日再取得された――」に始まるメリー夫人の経歴調査は、スクラントン市立図書館の年度別住所録に、一八九二年「ダージス・メリー家事手伝い、北九番街二〇二番地」とメリー十六歳の記録を発見、結婚記録の他、野口の死後は健康がすぐれないことを口実に、野口に関することは全て研究所に任せ世間の雑音から逃れるかのように次々と転居したとして、ロックフェラー資料館に残る八度に亙る転居届、一九四七年の新聞死亡通知「メリー・D・ノグチ十二月三十一日突然死亡、故野口英世博士の妻でありトーマスとジョンの愛すべき姉、葬儀はセント・ニコラス街一〇九番地のウォルター・コディー葬儀場で土曜日午後二時より」で幕を閉じている。

本書の発掘史料記録は以上であるが、著述の動機はグアヤキルで野口通りを発見、同地に建つ野口像の対面に始まるとしている。はからずも一九七一年東京野口英世記念会の野口胸像前で泣き崩れたI・R・プレセットの調査動機と同じで、プレセット著「野口英世」のコピーが目立つ。

人の生きた跡にはその時代背景、文化民俗的諸要素の探究を欠くことは出来ない。著者は優れた語学力に基づき、ややもすると現在まで軽視されて来たこの面に注がれた努力の跡は随所に滲み出ているが、折角苦労して収集された史料の取扱いと構成が散漫でルポルタージュ的記述と化しているのは惜まれる。

第七章医学の指導者の項等で、ロックフェラー財団について触れてはいるが、財団設立の目的経緯、悪評払拭のため設けられた国際保健委員会黄熱病撲滅計画の取組、黄熱病研究プロセクトの担わされた問題点と使命意義の解明、パナマ運河の開通に始まる南米・アフリカ黄熱病研究の中で、野口の置かれた立場と責務の追究が今少し欲しかった。とはいえ、本書に記された数々の新資料は貴重なものであり一読の要がある。

（石原　理年）

〔山手書房新社、東京都文京区本郷二―一九―七、電話〇三―五六八四―八六六一、一九九二年五月刊、B六判、三二五頁、定価二二〇〇円〕